

適応能力

2022.8.4

ウィズコロナという言葉がある。いまだ新型コロナウイルス感染症の終息が見えない中だが、デジタルを利用して新しい学びの形態が模索されている。数年前とは劇的に変わっている。教室にはタブレットやプロジェクターが、もはや当たり前なものとなっている。オンライン会議などにも慣れてきた。

今までは、一斉教育、チョークと黒板、紙の教科書、学校行事、部活動が当たり前だった。これらが、今後も残っていくとは思えない。デジタル教科書、遠隔教育、個別最適化などを取り入れた教育方法への転換が試行されている。

児童生徒に1人1台の情報端末を配布したからといってデジタル教育が進むわけではない。それには、学校のデジタル環境の整備、教員の研修と意識改革、家庭でのデジタル格差の是正、そして、教育実践の積み重ねとデータによる検証が必要である。

学校の当たり前の見直しも必要である。学校に通うことは、果たしてすべての子どもに必要なことなのか。遠隔によりできることはないか、必要のない学校行事はないのか、部活動はどこまで外部化できるのかなど、この機会に今までの当たり前を見直し、過密を避け、多忙化解消がなかなか進まない教員の負担も減らしたい。

その一方で、将来の社会生活を考えると、小学生と中学生には、対面での指導や学校生活の重要性がなくなるとは思えない。高校生や大学生になれば、社会性も育っているため、ある程度、デジタルを利用した遠隔教育も有効である。

遠隔教育を経験した大学生の話である。対面教育では、対面ならではの緊張感、表情が見える教育、人に会う苦痛やストレスの耐性をつける。遠隔教育では、通学時間が省ける、人に会うという苦痛から解放される、自分のペースで学習できる、私語やスマホに気を取られず、集中して学べる、自分の意見を主張しやすい。結論として、対面と遠隔の両方を組み込むのが最適となる。実際に娘の大学では、そうなっている。

数年前までは、いくら何でもそうはならないでしようと思われていたことが、どんどん現実味を帯びてきている。人には、環境の変化に対して動的にに応じていく適応能力がある。最近の言葉を使えば、レジリエンスである。環境の変化に対して自らを変化させる柔軟性である。これは、教員にも求められる。

もし、一斉教育、チョークと黒板、紙の教科書、学校行事、部活動などを奪われたとしたら、多くの教員はやっていけるのだろうか。急速な変化についていけるのだろうか。そんなことを本気で考えなければならない状況が、すぐ目の前まできている。